

# 知的障害のある児童に対する授業づくりの研究

—体育科サーキット運動の指導を通して—

○伊藤 曜子

(東京都立王子第二特別支援学校)

KEY WORDS: 知的障害特別支援学校 体育科 運動

## 1. 目的

昨今の教育課題の一つとして、中央教育審議会（2002）は児童・生徒の体力の低下傾向が継続していることを指摘し、児童の体力向上は、より豊かで充実した人生を送るためにも必要な要素であり「生きる力」の重要な根幹であることから体育の授業の重要性を示している。また、安井ら（1999）は「実践場面では科学的な配慮を欠いた体力づくりが協調される場面が少なくない」と指摘している。渡邊ら（2007）の調査では、体育の単元の目標やねらいが達成されていない理由として、教員の専門性の問題と個別の指導計画に関連する個々の目標や支援方法、評価に課題が挙げられている。さらに、鈴木（2009）の調査では、特別支援学級の体育学習の実践に際して、参考となる簡便で有効性の高い授業モデルを提示する意義を示している。

そこで本研究の目的は、知的障害のある児童のサーキット運動の種目に関連する運動要素についてアセスメントを行い、各対象児の種目別にプロンプトの種別と内容を決定し、フェイディングを行う施行を繰り返すことによって、最終的に援助なしで各種目が実施できるように指導を行うことを通して、知的障害特別支援学校の児童の体育科の授業づくりに役立つ知見を得ることである。本研究で行うサーキット運動において、プロンプトが新しい行動形成の支援に効果を示すことができれば、体育の授業で行う支援方法の課題に糸口を示すことができるのではないかと考える。

## 2. 方法

- 1) 授業参加者と対象児童: 知的障害特別支援学校小学部1年生33名, 教員13名。対象児童は2名。
- 2) 期間: X年毎週月曜日 10:25~11:10 全5回
- 3) 単元名: サークット運動「にんじやになろう」
- 4) 活動の流れと場所: Table 1に示す。

Table 1 体育の活動の流れ

時間配分	活動青グループ	活動赤グループ	配慮事項
3分	挨拶 今日の活動	挨拶 今日の活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サーキット運動はプレイルーム・忍者登場</li> <li>・支援依頼表をもとに支援する。ケースの担当は最終回まで変えない。</li> <li>・各種目で児童が待たないようにスタートする。</li> <li>・ゴールでメダルをもらう。</li> </ul>
15分	サーキット	準備運動	
1分	運動	周回走	
	移動	移動	
15分	準備運動	サーキット	
1分	周回走	運動	
	まとめ	まとめ	

- 5) 各対象児の運動課題とプロンプト: プロンプトの活用前に対象児童の種目別運動要素の評価を行い、種目別の評価規準を用いて種目別の個人の目標を設定し、種目別のプロンプトのタイプや内容を事前に決めて行った。授業では、支援依頼表をもとに対象児E, Fのプロンプトを行った。
- 6) 記録方法及び分析方法: VTR撮影 評価は、支援依頼表の目標と支援方法を元にケース児童の担任教師が行い、エリクソン（1984）の基準により運動チェック表を元に筆者と小学校教員1名で映像の分析を行う。
- 7) 種目と配置: スタート→島跳び2コース（直線, 交互）

→平均台2コース→ケンケン（7輪）・ケンケンパ（9輪）  
→ミニハードル（7本）、ラダー（10枠）各1コース→ゴール  
（2コースある種目、ミニハードルとラダーは事前を選択）

## 3. 結果

代表的な事例を Fig.1, Fig.2 に示す。

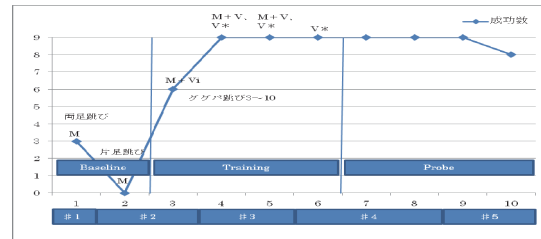


Fig.1 F児「ケンケンパ」指導経過

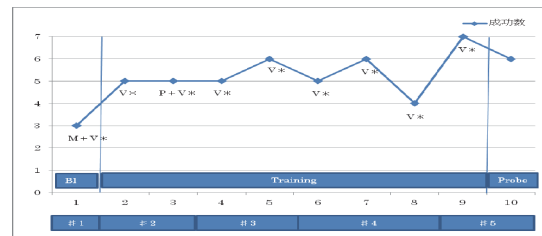


Fig.2 F児ミニハードル指導経過

F児の体育の授業における15分間のサーキット運動の取り組みの回数と「ケンケンパ」の指導経過を Fig.1 に、F児の「ミニハードル」の指導経過を Fig.2 に示す。

Fig.1 の縦軸は円形の枠内を両足跳びで両足着地ができた数を示す。「ぐぐば」跳びは、2回目まではモデルを示しながら「ぐぐば」といいながら跳んだ。言語的プロンプトは、6回目まで跳ぶタイミングに合わせて「びょん」ということばをかけた。F児は、モデルと跳ぶ時の「びょんびょん」という輪の配置に合わせた言語的プロンプトが効果を示した。Probe期の1,2回目は自ら「ケンケンパ」と言いながら正確に跳ぶことができた。Fig.2 の縦軸は、両足跳び両足着地ができた本数を示す。1~9回は、共通して1本ずつ跳ぶ時に「びょん」という言語的プロンプトを行った。初回にモデルも示した。身体支援は、両足跳びの準備姿勢ができていない時に行った。主なプロンプトは、跳び上がるタイミングで「びょん」という言語的プロンプトである。F児のミニハードルの指導の成功に言語的プロンプトが効果を上げた。

## 4. 考察

アセスメントを元に種目における運動技能の課題や必要なプロンプトのタイプ、量、内容等を決めて実施し、その結果、知的障害のある児童にプロンプトが運動形成に有効であることがわかった。授業では、支援依頼表を元に教師がプロンプトを行い、サーキット運動を周回しながらF児のプロンプトのタイプや量を変えながら運動技能を上達させ、最終的には、プロンプトをなくしても成功数を上げることができた。このことは特別支援学校の体育の授業でプロンプトを取り入れた指導ができる可能性を示している。

(ITOU Yoko)